

内田康夫

盲目のピアニスト

中公文庫



中公文庫

もうもく
盲目のピアニスト

定価はカバーに表示してあります。

1989年 1月10日初版

1996年 9月30日 7版

著者 うちだ やすお
内田康夫

発行者 嶋中鵬二

発行所 中央公論社 〒104 東京都中央区京橋 2-8-7 振替 00120-4-34

TEL 03-3563-1431(販売部) 03-3563-3664(編集部)

©1989 CHUOKORON-SHA, INC. / Yasuo Uchida

本文・カバー印刷 三晃印刷 用紙 本州製紙 製本 小泉製本

ISBN4-12-201580-4 C1193

Printed in Japan

乱丁本・落丁本は小社販売部宛お送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

中公文庫

盲目のピアニスト

中央公論社

目次

盲目のピアニスト	7
愛するあまり	65
陰画の構図	119
想像殺人	181
濡れていた紐	221
あとがき——はじめての短編集	271
解説 小池真理子	275

盲目のピアニスト

盲目のピアニスト

1

どこから忍び入ってくるのだろう、咲き初めた梅の香りが微かに鼻孔をくすぐる。

（あ、咲いた——）と輝美は目覚めた。

ベッドを抜け出してカーテンを引くと、庭の古木に紅色の花が七つ八つ……、いや、数える間に咲くように、さらに見えてくる——というのが、去年までの春の習わしだった。

輝美はベッドに仰向いたまま、梅の香りを深く吸い込んだ。梅の花の紅色が頭の中のスクリーンにポツと灯る。けれども花の形は曖昧で、思い浮かべるそばから、すぐに鉛色のスクリーンに溶けて、消えてしまった。

あれほど毎日のように眺めていた梅の木も、庭の木々も、その向こう側にある上野の森の佇まいも、何もかも曖昧で、とりとめがない。こんなことなら、もっとしっかり記憶に止めておけばよかった——と思う。

母親や友人の顔の記憶も、いつかそんな風に薄れていってしまいうにちがない。

医者に失明するかもしれないと、はじめて言われた時には、輝美はそんな理不尽なことがあつてたまふかと思つた。

（私の人生はどうなつちやうの？ 私のいのちは……、私のピアノは……）
それまでの人生が、あまりにも順調で、栄光に輝いていただけに、逆境に立つた時の自分というものが、輝美には想像することすらできなかった。

だが、医者の宣言が刻々と現実のものとなつてきて、ついに両眼とも失明したいま、輝美は否応なしに、新しい生きかたを模索しないわけにはいかないのだ。

（死を選ばないかぎり――）

と輝美は思う。

何度、死ぬことを考えたかしのれない。両親もそれを恐れ、輝美を常に監視下に置いていた。輝美の傍にはいつも誰かが付き添い、トイレに行く時だって、母親がちゃんと付いてきた。はじめの内は手を引いたりして、介護者の役割を果してくれているものとはかり思っていたのだけれど、それだけが目的ではないことが、じきに分かつた。

「輝ちゃん、そのベルト、はずしておきましようね」

言いにくそうに、母親は言つて、輝美の腰から、お気に入り飾りベルトを取つてしまった。

「何よ？ どうして？」

輝美は母親の不当を詰^なめて、鉛色の空間に向かって、両腕を突き出した。

「ごめんね、でも……」

言いかけて、母親は黙った。その瞬間、輝美は、家族たちが自分の自殺を警戒していることを悟った。

「ばかねえ、死んだりなんかしないわよ」

笑おうとして、頬がこわばった。ほんとうに死の誘惑に逆らい続けることができるかどうか、輝美には自信がなかった。

一カ月たって、輝美は生きていた。家人が死ぬチャンスを与えてくれなかったというより、自分自身に死ぬ勇気がなかったのだ——と、輝美は自嘲ぎみに思うこともある。しかし、いずれにしても生きて以上、何かをしなければならぬ。一日中、ベッドに寝ていることなど、輝美にはできっこない。

（だけど、何をすればいいのよ——）

輝美は焦^これて、無意識に、膝の上で激しく十本の指を叩いていた。その指の動きが、シヨパンのスケルツォであることに、やがて気付いた。ヨーロッパ給費留学生の選考テストを前に、仕上げの特訓中だったことを思い出した。選考演奏会の当日はとくに過ぎ去っていた。

病院から帰って、輝美は一度だって、ピアノに触れていない。戸津家の中からピアノ

の音が消えて久しい。家族の誰もが、ピアノのピの字も話題にしないよう、神経を使っているのが、輝美にも分かっていた。

（私からピアノを取ったら、なにも残らないわ——）

少なくとも三年前には「天才少女」と謳われたし、今年正月号の音楽雑誌では「ことしのホープ」の中の一人に数え上げられてもいたのだ。自分の人生はピアノを弾くためにあるのだし、ピアノが人生そのものだと思っていた。

ピアノが弾けなくなったら死んだも同然ではないか——。現在の自分は、だとすると死体のようなものだ。そう思うと、輝美は自分自身に対して腹が立ってならなかった。三歳から始めて、二十年近く、時には泣きながら続けてきたことは、いったいあれは何だったというのだろう——。

悔しまぎれに、輝美はピアノに向かい、思いきり十本の指を叩きつけた。猛烈なスピードでショパンのエチュードを弾いた。

（指は動くんだわ——）

輝美にとって、それは驚くべき発見であった。闇に向かって歩いたり、何か物を掴もうとしたりする際の、どうにもならないもどかしさばかり味わっていたせいか、輝美は全身のあらゆる機能に障害を起こしているような錯覚にとらわれていた。

だが、ピアノの鍵盤の上だけには、自分が自由に遊べるグラウンドがあったのだ。黒

鍵と白鍵が規則正しく配列されたグラウンドは、隅々までが頭の中にイメージされつくしている。自分の鼻の頭を抓つまむより容易に、輝美は正確に目的の鍵を叩くことができた。時折はミスタッチもあった。それは従来、瞬間的に視覚に頼っていた部分であって、それさえ克服すれば、自分にも人並みな演奏が可能なのではないか——という気がした。ピアノの音に驚いて飛んできた母親に、輝美は「ママ、私、もういちどやり直してみるわ」と言った。

「そう、そうなの、よかった」

母親は感きわまつて絶句して、輝美を抱きしめて泣いた。

「やあねえ、そんなに大騒ぎするほどのことじゃないのに。レイ・チャールズだってステイービーだって、ヴァイオリンの和波さんだって、みんな生まれた時から目が不自由だったのよ。それに比べれば私なんか、楽譜の記憶はあるんだし、ぜんぜん恵まれてるわ」

そう言いながらも、輝美はやはり一種の悲壮感に酔ってはいた。未知の大海原に船出するようない、気宇壮大さと、それと同じ程度の不安があった。

2

輝美の一大決意は決意として、とつぜん盲目になったという重大なハンデを克服し、

実際にピアニストとしてやっていくのは、そう簡単なことではない。まず、新しい指導者を探さなければならなかった。それまで輝美が師事していたのは、間宮節子という、すでに現役を退いた女流ピアニストだが、指導者としての手腕は高く評価されていた。

輝美がピアノ生活を続けたいと、母親に頼んで伝えてもらってから何日も経って、間宮女史が、残念ながら輝美の希望には添えないと断りを言ってきた。

「あなたの勇気と才能は認めるけれど、現実にはとても難しいことよ。少なくとも、私にはそれにお応えできるだけの能力も知識もないわね」

それはそうかもしれない、目の見えない者にピアノを教えた経験なんて、誰だってありはしないのだもの――。

そう思いながら、輝美は間宮女史の冷たさを恨んだ。間宮の本音は、モノにもならない弟子を育ててもしょうがない、ということなのではないか――と疑った。ついこのあいだまでは、世界に通用するホープとして、輝美は間宮門下のスター扱いだったのだ。

「どうしても言うのなら、心当たりを探してみてもいいけれど」

間宮は気の毒そうに付け加えた。

「ぜひお願いします」

輝美はとにかく頼み込むしかなかった。間宮は思ったより早く、新しいピアノ教師を紹介してきた。

「ちょっと偏屈で変わった人だけど、それさえ辛抱できるなら、優秀な教師であることは確かよ」

なんだか含みのある言い方でそう言った。偏屈でも何でも、この際、贅沢は言っていられない。早くレッスンを再開しないと、腕のほうがどんどん鈍ってしまいそうな不安を、輝美は深刻に感じているのだ。

指定された日に、輝美は母親に手を引かれ、新しいピアノ教師の自宅を訪れた。

山手線の駒込駅から、普通の足なら十分ぐらいの距離だろうか。母親の腕に縋り、慣れない手つきで白い杖を突きながら歩くと、倍ほどもかかった。この白い杖と色の濃いサングラスが、周囲の人々に保護を求める強力なシグナルであることを、その立場になってみて、輝美ははじめて実感できた。

いずれは独りで歩くことを想定して、道筋で行き会うさまざまな音を確かめながら歩いた。横断歩道の盲人用のオルゴールの音が、こんなに頼もしいとは思ってもみなかった。そして、パチンコ屋の騒音、食べ物屋の匂い、鎖に繋がれた犬の鳴き声……等々、何ひとつとして道しるべにならないものはない。

行く手にある物を杖の先でコツコツと探り探りゆくのは、未知との遭遇を予期するほどの、神経の集中を、絶えず必要とした。急に接近する人の足音や自転車の気配には、恐怖に近いものを感じて、思わず身が竦んでしまう。逆に、歩道の縁石を降りて車道を